
Melancholy

美桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Melancholy

【Nコード】

N5864Y

【作者名】

美桜

【あらすじ】

新米看護師の桜庭 壬紀に立ちばかるのは、自分を慕っていた可愛い天使達ではなく、人嫌いでひねくれものの堕天使で…！？

イケメンが一杯の職場に立ち並ぶ恋愛フラグをどう攻略していくの！？

可愛くて頑張り屋さんで誰からも好かれて、恋愛にちよつと…（？）鈍感な白衣の天使と、

お金持ちで名声もありイケメン…だけど、人嫌いで独占欲の強い腹黒ドSな鬼畜堕天使、

それと、ちょっと癖のある職場の同僚達によって繰り広げられていく恋愛ストーリーです。

自身のブログ↓<http://ameblo.jp/kurunokuronosus626/>にも投稿をしていくつもりであります故、ご理解の程宜しくお願い致します。

いきなりの、移動…ですか？（前書き）

「はじめまして。」の言葉を言うべき人も、

「また来てくれてありがとう。」の言葉の人もいるかもしれませ
ん。

第二作目です。

マニアック…というわけではなく、一般の方も何気なく見ていた
だけ…と思いますので、肩の力を抜いてお楽しみくださいませ。

いきなりの、移動…ですか？

“何も変わらぬ朝だった。”

彼女は語る。

後の後悔を胸に秘めて。

「おはようございます。」

と、いつものように5西の小児科病棟のナースステーションの扉を開く。

しかし、いつもなら返ってくるであろう元気な返事は今日はない。虚ろな目をした男性職員の顔を見て、思わず「あつ。」と声を上げる。

「に、西宮先生！？」がっしりとした体型に似合わない素敵な笑顔、

そこそこの美形で、女性職員からも小児からお母さんたちからも評判もあるに関わらず、

私に対するセクハラ発言やセクハラやセクハラやセクハラなどで最近病院で有名になりつつある残念な先生は昨日までの元気な西宮先生に何が…というほど別人の様であった。

私を視界に捉えた西宮先生（？）は、未だ曇った目、ふらつく足取りで私の前まで来ると、急に私の肩に両手を置いて「移動なんて嘘だよなあっ！！？」と物凄い形相で尋ねた。

余りにも先生の顔が怖かったのもあるが、実際に自分の耳には入っていない情報だったので必死に首を縦に振る。

その瞬間、先生の顔が満開の笑顔（いつも×100倍だと思ってください。）となり、「よかった…」という呟きに合わせて私は先生の腕の中に…入るわけがなかった。

凄まじい音と共に、床に叩きつけられる西宮先生。

振り返って見ればそこには、いつものように呆れ顔で微笑む夏依…師長と、

見たことはないが、きつと師長クラスの人なんだなあ。と思うような雰囲気纏う30前後の人が額に青筋を浮かべ、通称：青ファイルと呼ばれる物を掲げていた。

その人はこちらに気が付くと、青ファイルをスツと元の位置に戻し、「怪我はない？」と微笑み、手を差し伸べてくる。

その笑顔は、さっきの青筋を浮かべている人と同一人物なのかを疑ってしまうほど爽やかで、整った顔立ちをしていた。

その笑顔にどう対応していいか、そもそもこの人は一体誰なのかに頭を悩ませていると、

夏依が助け舟を出してくれる。

「ほらっ！！壬紀が困ってるでしょ！！挨拶が先よ！！」

夏依に諭されて、「分かったよ。」と言いながらこちらに視線を戻し、「僕は、柳 諒って言うんだ。7東の精神科病棟の師長をやってます。これからよろしくね、桜庭 壬紀さん。」

言葉に添えられたにこやかな笑みに見惚れそうになりながら、何か重要なことをすっ飛ばされたことに気付き、もう一度言葉を反芻する。

「え、と…これからよろしくっていうのは…？」

「うん。君が精神科病棟に来るということだよ。だから、よろしくね？壬紀ちゃん。」

う、嘘でしょ…？

いきなりの、移動…ですか？（後書き）

登場人物

主人公：桜庭 壬紀「sakuraba miki」

- ・天然…というより鈍感
- ・ややチョコレートブラウンの髪色に栗毛色の瞳を持つ美

少女

- ・20歳

・♀

小児科医師：西宮 陸「nishinomiyariku」

- ・ちよつと凄く残念な壬紀と同じ小児科病棟で勤務してい

た医師

- ・こんがりと焼けた肌に脱色して銀髪にしている
- ・壬紀に一目惚れ
- ・子供、病院関係者と親にも大人気
- ・イケメン
- ・26歳

・♂

小児科師長：桃木 夏依「momogikayo」

- ・壬紀の良き理解者であり、控えめで気立てのよい壬紀のことを好ましく思っている。

- ・壬紀が看護師を目指すきっかけとなった人

- ・既婚者

- ・美女

- ・35歳

・♀

精神科師長：柳 諒「yanagi ryō」

- ・ とてつもないイケメン。だが本性は…
- ・ ナチュラルスイングショットで茶髪
- ・ 女受けがとてつもなくいいが、本人は壬紀意外興味なし
- ・ 病院長の孫
- ・ 師長としてはかなり若いが有能
- ・ 壬紀を無理やり精神科へ連れてってしまう
- ・ 27歳

・
♂

基本、髪の毛の色とか気にしません。

自由主義ですww

見てくれてありがとうございます。
なるべく早めに更新をば…！

私の意見は…聞いていないのですね。（前書き）

また来てくれたことに頭が上がらない想いです。

電車の中、授業中…と構成を考えています。

意見・要望のあるかたはお気軽に声を掛けてくださいます。

それでは、二話目の始まりです。

私の意見は…聞いていないのですね。

桜庭 壬紀20歳。

小児科の師長を務める夏依さんに憧れて晴れて小児科の看護師に…
…と思つた矢先、突然の移動命令。

「え…？」なんて思つてるうちに、移動先である精神科の師長である柳先生がいつの間にかいた部下の面々に指示して、ようやく馴染んできた小児科のナースステーションの中から私の荷物たちが消えていく。

これには青ファイルを額に打ち付けられ、床に沈んでいたちよつと凄く残念な先生、西宮 陸先生も真面目に怒ってくれて、「ちよつと待て！いくらなんでも横暴過ぎるだろう！壬紀ちゃんはまだここに来てまだ間もない、こんなに早く移動なんて…！！」と言つたが、柳先生に言葉を遮られる。

「黙れ。これは院長命令でくだされた移動だ。何か言いたいことがあるのなら、俺じゃなく“あの人”に言っんだな。」

『その言葉を放つたのは、今さっきまで自分に微笑みを向けてい

た人物なのだろうか。言葉遣いも「俺」になってるし。…そもそも
“あの人”って誰?!」睨み合う二人の間でそう思う。

悔しそうに「クソっ!!」と言い俯いて硬い表情を浮かべていた
西宮先生が、ふと気付いたように「…院長、命令…?」と呟き、ハ
ッと顔を上げる。

その顔には今まで見たことがないような怒りの表情が浮かんでいた。
た。

「…てめえ、そういうことかよ。」低い声色と共に発せられた鋭
い視線は、まっすぐ柳先生に向かっている。

それに対し、柳先生はとぼけた口調で切り返す。

「…何のことかな?僕は人手が足りないから、看護師さんが一人
欲しいってお願いしただけだよ?…とびつきり可愛い看護師さんが
一人、ね。」

最後に艶やかな笑みをたたえ西宮先生から視線を外し私を見る。

その笑みの意味がわからなくて、『なんのことでしょう?』とい
う表情で少しばかり首を傾げる。

その瞬間、柳先生が鼻を押さえヨロヨロと後退り、後ろの西宮先生の机に覆いかぶさるようになって悶えだした。

憐れむ様な夏依先生の溜め息が何故か私にも向けられているような気がして、『私のせいですか！？』と縋るような視線を向ければ、諦めの表情。

…何か、もう、ヤダ…泣きたくなってきた。

「…なるほど、凄い破壊力だな。僕を誘惑するなんてさ。（めっちゃ可愛いじゃんか…。）」もう立ち直った柳先生がさっきより幾分厳しい顔つきでそう言い放つ。最後らへんは聞こえなかったけど、何だかさっきから凄い悪寒がする…。

いえ、言葉はカッコいいんですけどね…耳真っ赤ですよ、先生。

注意しようと思った時グイと腕を引っ張られ、私の体は不可抗力に従って西宮先生の腕の中にすっぽりと収まった。

一瞬何が起こったか分からなかったが、すぐに抱きしめられてい

るんだということに気がつき、頬が真っ赤に染まっていくなのをも自分でも感じた。

「やあっ！先生離して！！」後ろバグと呼ばれる恋人達の定番シチュがこんなセクハラで終わっていいはずがない！！精一杯抵抗するが、一向に腕の拘束が解ける兆しはない。

「目の前に人がいるのに、こんなッ……！！」と涙目でそう言つと、「……じゃあ、人のいないところならいい訳？」とアブない目をした獣が見下ろすようにして私を見ていた。

その言葉に、異変を感じ防衛反応が発動……する前に、「ごふあ……！！」

一撃で私の体を拘束していた腕は解かれ、その腕の持ち主は例によつてまた床に叩きつけられていたのであった。

……青ファイルという武器を持つその人によつて。

私の意見は…聞いていないのですね。（後書き）

…懲りないですね、陸センセはww

と、まあこんな感じでグダグダやっていましたが、次から病棟の本格的移動…（やつとですね

に入っていきたいと思っています。

2時間掛けて書いた割に、誤字脱字多くて苦戦しました（汗

実習でも、この武器として出てくる青ファイルを使うのですが、ファイルそのものが武器です。足に落とすと爪が折れます（実話）

ですから、初めから凶器であるものを人に向けて放ってはいけません。

（（こんな使い方する人は居ないと思いますが…

最後に：

こんな駄作に付き合ってくれる全ての人に対し幸あらんことを。

言っている意味が…分かりません。（前書き）

すいません、次こそは病棟を移動すると思います。

少し長くなるかもしれませんが、楽しんでいただけたら光栄です。

言っている意味が…分かりません。

ああ、何かもうどうでも良くなってきました。

もう好きにしてください…。

諦めの微笑みを浮かべる私の目線の先には、さっきから言い合いをしている二人の姿が。

「だから！何でデメーはその凶器（青ファイル）を人に向けてんだ！危ねーだろが（俺の命が）！！」

「お前こそ何だその口の聞き方は。…というか、壬紀に触れたことだけでも万死に値するというのは、抱き締める…だと？！ふざけるな、今すぐ飛ばしてやる（天界とか冥界の方に）。さあ、そこに直れ。」

「いや、そんな顔に黒い影浮かべたまま青ファイル持つてる人んとこ行きたくないし。ってか、別の意味で逝っちゃいそうだから！助けて！壬紀ちゃん！」

西宮先生がサッと私の後ろに隠れる。…何気にさっき会話の中で柳先生から呼び捨てにされたような…まあ、いつか。別に減るもんじゃないし。それよりも問題はこの人。私の背に隠れる西宮先生だ。

さっきまでの後ろハグはどう責任とってもらおうかな。先生言ったら、「じゃあお嫁さんにしてあげる。」なんて言われそうでやだなあ。っていうか、前言われたなあ。「絶対に嫌です。」って言うたら泣いてたけど。

先生みたいにカッコいい人だったら、選り放題だと思うんだけど……性格はスルーしなきゃだけど。

話ずれちゃったけど、そうだな。お昼でも奢ってもらおうかな。最近美味しいって評判のイタリアンのお店が出来たらしいから。

「西宮先生。さっきの後ろハグの件なのですが……」少しは反省してるのかな？と思ひ厳しい表情を作る。

そう切り出した瞬間。西宮先生に制裁を加えている柳先生も、頭を押さえながら言い訳を繰り返す西宮先生も動きがピタッと止まり黙ってこちらを見る。よしよし、反省してるみたい。

「さっきの件……最近この辺に出来たイタリアンで勘弁してあげます。」さっきまでの厳しい顔を崩して少し笑顔を作る。

すると柳先生は不満の表情を、西宮先生は喜びの表情を浮かべた。

「（なんて可愛いんだ！）そ、そんだけでいいの？……それは、許してくれるってことで、いい……のかな？」嬉しそうに顔を綻ばせる西宮先生が、「……君から許しがでなかったら、僕は僕の全てを君に捧げるつもりだったよ。」と言っているのを聞いて、自分の選択が今後の運命を握っていたことを知り、素晴らしい選択をしたと心の中で歓喜に浸っていた。

「今回だけですよ……？」こんなことが何度もあつては堪らない。

私の心臓ももたないだろうけど、何より西宮先生とキスまで体験してしまいそうだ。（キスは本当に好きな人になりたいし。）西宮先生は恋人がいるだろうから私とこんなことしていると知られたとしたら怒られてしまうだろう。こうなったら、今まで以上にセクハラブロックを強化しないと！！

と、決意を固く誓う私とにこやかなムードの西宮先生。このままいけば丸く収まったはずだったのに、不満顔のこの人が言葉を紡ぐ。

「甘すぎるよ壬紀！！（俺だってまだまともに触れてさえいないのに！）しかも一緒にイタリアンなんて……！！」悔しそうに呟く柳先生の顔がハツと気付いたように変化して嬉しそうに微笑む。その笑顔は他の人にとっては極上スマイルだったんだろうけど、段々と柳先生の裏を知りつつある私にとってのそれは、背筋がゾクツとするような不気味な笑みだった。

「ねえ、壬紀…好きなのはイタリアンだけかい？」「おい、ちよつ……」壬紀は精神科に移動してくるんだから歓迎パーティーを開かなきゃね。今日は皆都合が合うかわかんないから、僕と壬紀だけで話し合おうか…今後のことについて。」

…先生の言った「今後」というのが……。の今後」と前に何か付きそうな感じがして何だか凄く気になったけど、私の中の第六感が最大級の警報を鳴らしていたので、あえて聞かないことにした。つていうか、あの西宮先生でも止められない柳先生って一体……。

私がそんなことを考えているうちに、柳先生が「じゃあ、とりあえず病棟移ろつか」なんて年甲斐もなく……まあ、美形だから似合うんだけど、語尾に星が付きそうな爽やかな笑顔に合わない強引さで私の手を引いていく。

ドナドナされていくことは決定だなとは思っていたけど、まさか本当になってしまうとは…。「え、え？」柳先生に手をしっかりと握られ逃げられない私のもう一方の手を西宮先生が掴む。

「ちょっと待てよ！！話は終わってねえよ！！この子じゃなくても別の子を捜しゃいいだろうが！！この子はここに必要なんだよ！！その手を離せ！！！」

「何言ってるんだ！！うちの方がここよりもこの子を必要としている！！！」

「はあ！？そんな訳ねえだが！どんな必要性だよ。」

「（目の保養と、俺の）心のセラピーだよ。」

「お前、冗談もいい加減にしろよ！！今、何だったよ！？結局自分の為じゃねーか！！！」

「…さつきからお前お前と煩い…年上で、目上の人間に対する口の聞き方を習わなかったのか？」

…どうやら、剣呑な雰囲気になって参りました。

続く

言っている意味が…分かりません。（後書き）

はい、こんばんは。

もう眠すぎて、作者の雰囲気は剣呑かもしれません…；

ですが、続きはまだまだある…そんな時、耳元に悪魔が現れて「休め休め」と囁いているのであります！！

どうやってこの誘惑を断ち切れと言うのでしょうか？

作者には出来ません！！

と、言うわけでまた明日。

おやすみなさい。

三

本ッ当にすいません。

続の方で必ず移動させますので…！！

言っている意味が…分かりません。

続（前書き）

さあ、遂にやってきました。

今回こそは…！！

言っている意味が…分かりません。 続

前回のあらすじ

『何言ってるんだ！！うちの方がここよりもこの子を必要として
いる！！』

『はあ！？そんな訳ねえだが！どんな必要性だよ。』

『（目の保養と、俺の）心のセラピーだよ。』

『お前、冗談もいい加減にしろよ！！今、何つたよ！？結局自
分の為じゃねーか！！』

『…さつきからお前お前と煩い…年上で、目上の人間に対する口
の聞き方を習わなかったのか？お前は？』

* * * *

「うつわ。超うぜー！！こんな奴ほつといて仕事しよ、壬紀ちゃん。」

「え、あのッ！」グイと腕を引かれる。

「駄目だぞ、壬紀。こんな馬鹿と一緒にいたら、お前まで馬鹿に

なっちゃうからな。行こう。」

「ひゃう!!」今度は反対から。

「ほら!嫌がつてるだろーが!!それに、馬鹿って言う奴が馬鹿なんだもんねー。」

「(蔑みの目)…お前も言っただろうが、馬鹿め。」

「んだと!？」

二人が両側から引つ張り合う形になっていて、逃げるに逃げられない…!!ちよっ、痛い!痛いよ!!腕を離してー!!

「(スウッと息を吸い込む音)いい加減にしなさいっ!!」

物凄い雷が落ちました…どこかで聞いたことのある声。

「く!!!!」

柳先生と、西宮先生に振り下ろされる青ファイルと云うなの、凶器。柳先生が西宮先生に使っていたときも十分痛そうだったけど、今回は青ファイルの残像しか見えなかった…夏依先生、凄すぎます!!

「何するんすか!師長!!」

「そうだよ!痛いじゃないか!!」

「…あんたらはねえっ!!」

…あ、また雷が落ちそうです。

頭に大きなたんこぶを作った二人は仲良く床に正座をさせられていました。

「あんたらは、二人してギャーギャーと煩いわね！！少しは、壬紀の気持ちも考えなさいよ！！」

その言葉に、二人は顔を見合わせバツの悪い顔をしてこちらに向き直り、「ごめんっ！！壬紀（！！）」ちゃん！！」と床に頭を付けて謝る二人。

…やれやれですよ。

その後、話し合いの末にお昼はこつち（小児科）へ戻ってもいいということになり、夏依さんが子供達とのランチタイムを設けてくれる。と、いうことになった。…何故か、男二人が「一緒に食べる！！」と言っていたので、お弁当は作れるのかを聞くと、目を逸らしていた。仕方がないので、私が二人の文も作ってきてあげることにした。二人とも物凄く喜んでくれたので、期待に添えるよう努力しなくっちゃ！！

「元気でやってきなさいよー！！」と言って手を振ってくれている夏依さんと、まだまだ納得のいかない顔の西宮先生を後にして、ロツカールームへと足を進める。この病院は一人の患者に不自由が

あつてはならないということで、看護師や医師の数が従来の病院に比べ物凄い数である。なので、医師や、看護師の更衣室が2～5階ロッカールームの職員は3階の更衣室を（1階は外来の人のふれあいの場。職員がいるのは、2階から。）6～8階の職員は7階の更衣室を使うようになってる。

柳先生の部下の方たちが持つて行つてくれたようで、もう殆ど私の荷物は残つていなかったけど、ロッカーには着替えの服がある。流石に女子更衣室には入れなかったみたいで、私の荷物は朝来た時と同じようにそこにあつた。それを持つて柳先生が待つエレベーターへと急いだ。

「…どうして私なんですか？」移動中のエレベーターの中で思つていた当然のことを口にする。

「うん。僕が君を近くに置いてきたかつたっていうのもあるんだけどね、そんなことよりも。」いやいやいや、そんなことじゃないです。何言つてるんですか、この人！！

私の汚いものを見るような目線を避けるように立ち位置をずらし、切つた言葉の先を続ける。

「…ただ単純に、見てみたかつただけかもしれないな。」え、私を…ですか？そう問うと、柳先生は首を横に振り、自嘲気味に「男に媚びない子つて言うやつをね。」と呟いた。

でも、そこでまたいつもの顔に戻り話し出した先生…何故か、何故かそれだけで私は柳先生のことを少し知つた気がした。

エレベーターから降りて、ようやく8階の精神科のナースステーションへとたどり着いた。緊張して慎重に扉を開くと、

パンパンパンッ！！（クラッカーの音）

「「ようこそ、精神科病棟へ！！」」

鳴り響くクラッカーの音と降り注ぐ紙吹雪。驚きに前を見れば、さっきの私の荷物を運んでくれた人達がにこやかに笑っている。

「さあさあ、こつちへおいで。」

「オレンジと、アップルどっちが好き？」

「やっぱ、超可愛いなあ。食べちゃいたいくらいだよ。ねえ、何歳？」

「さっき見た時よりも、やっぱ生の方がいいよな。彼氏いるの？」

手を引かれあれよこれよという内に、いつの間にか先生たちの真ん中に座らされ、質問攻めにせれていた。

「お前らなあ……。柳先生が怒ってるんだか、呆れてるんだか分からない表情で「はー。」とため息をつく。それに対して、皆さんは

「「荷物運ばせておいて。自分はエスコートしてきたじゃないですか！」「」と、怒りモードだ。

「…あの、ごめんなさい。私の荷物…重かったでしょう?」そう
言って視線を床に落とすと、

「……つつつ!!!」「……何故か皆鼻を押さえて伏せってしまった。
た。

歓迎してくれてるってことだね…?と、とにかく、いい人達み
たいでよかった。

全員を見渡す。結構皆若いんだな…あっ!!

視線の先には一人の青年。

彼も目が合うと、気まずそうに目を逸らす。

…どうして、どうしてここにいるのよ!!

言っている意味が…分かりません。 続（後書き）

はい、やっと移動完了致しました。

長かったですね…

新しい職場で、謎の青年との出会い…それも、主人公の知り合い？

次の投稿をお待ちくださいませ。

白衣の天使に魅せられて 西宮：side（前書き）

今回は初めての男性視線で書いてみました。

壬紀に出会う前の西宮先生をずっと想像していたので…

自分では結構楽しく書けましたww

どうぞ、ご覧下さい。

白衣の天使に魅せられて 西宮：side

天使を見た。

夢じゃない。

思いきりつねった頬がジンジンと痛む。

夢なんかじゃない。

純白の白衣を纏った天使が俺の前に、いる。

いつもよりやや遅刻気味である。

こうなったのも朝起きたら俺の部屋で名前も知らない女同士がど
つちが彼女だとか何とか言っていたせいだと思う。

小さく舌打ちして、いつか女が使ってくれと無理やり押し付けて
きたどこぞのブランドものの腕時計を見やる。

時間的にいって、到底徒歩では間に合わないだろう。遅刻は、本
来は5分以内なら何ら問題はないのだがうち（小児科）の腹黒師長
が「5分？はあ？遅刻して言い訳ないじゃない。あんた馬鹿なの？

あ、馬鹿だったわね。」などといい、今まで黙認されていた『5分まではオツケー』なんて甘いルールは儚く散ったのだった。仕方がないので自分の愛用としているロードレーサーを漕ぐことにした。始めのノロノロとしたスピードから次第に速度を上げていく。いい風だ。これなら間に合うだろう。機嫌を良くしてどんどん速度を上げる。病院まであと200m位になる曲がり角を曲がろうとした時。

「!!!」

人がいた。…まあ、この時間帯なら人が歩いていてもおかしくはないのだが。

「つつ!」思わずロードレーサーを横に倒す。自分の漕いでいた速度が倍となって自分に返ってきて声にならない悲鳴を上げた。

…我ながら凄いスピードを出していたものだ。

もしこのスピードで人を轢いていたのなら、怪我どころでは済まされなかっただろう。取り敢えず、いい判断をした…と思いたい。

「あのツ…大丈夫ですか!? ああ!! …血がこんなに出る!!」慌てた声がある。俺が轢きそうになったのは女だったらしい。

「…大丈夫、だ。俺が…悪いんだし、な。お前は、どこか痛いところはないか?」

「はい。貴方のおかげです。どこも怪我してません。」

「い、や…だから、俺が…もう、いい。」

…俺が言うのも変な話だが若い女なのであろう。でもその声は俺の周りを彷徨く女たちから発せられる不快な高い声ではなく、鈴の音がするような澄んだ声だった。クソっ、逆光で顔が見えん。

…多分、何もできなくて逃げてしまっただろうな。そんなことを考えながら、でも何故か俺の心は落ち着いていて、それもいいかな…なんて考えていた。彼女ではなく俺が怪我をしてよかったと。慌てる彼女に最後の力を振り絞って言う。

「…おい。俺を置いて、早く…行け。他の奴に、見つかったら…面倒に、なる、からな…。ああ…でも、もし、出来るのなら、助けを呼んで…くれないか。そのの、病院に…」ヤバい。本気でヤバいぞ…舌がもつれて、頭、もガンガンする…く…そ…。

俺はそのまま意識を手離した。

次に俺が目覚めたのはベッドの上だった。うざったい女共が奇声を上げる。だが、その中にはあの声がなく、自分が望んだ通りになったのにいささかシヨックを受けた。

治療中も、何故か俺の頭の中には顔も見えない少女のことで一杯だった。あの時もしかしたら怪我していたんじゃないかとか、せめて顔と名前ぐらい聞いておけばよかったとか、少なくとも俺の名前くらい教えていれば、また会えたんじゃないかと。変な話、俺は今まで一度も女には不自由したことがなく、自分から相手を求めることなんてしたことがなかった。

…なのに、初めて気になった女が顔も名前も知らない少女だと？

どうやって捜せばいい？…自分には罰が当たったのだろうか？今まで散々人の心を踏みにじってきた自分に。相手が自分の名前を知らないことの悲しさを伝えようとしてるのだろうか。

…ならば当然の報いだ。

* * *

その日は有給休暇をとり、まだ痛む頭で自宅に帰った。そして、やるべきこと…ケジメをつけるために部屋にいた彼女達に謝った。それだけでなく、ケータイに登録されていた女の名前は全て消した。会える人物にはなるべく直接会って話をした。

彼女たちは、泣いた。『信じられない。』と言いながら俺をぶつた子もいた。水をかけてきた子もいた。だけでも俺は謝り続けた。自分が彼女たちにしてやれることなど、出来ることなどもう、何もないから。

そして、全員と別れた後、俺は熱を出した。

熱にうなされながら何度も彼女の夢を見た。彼女の名前も知らない俺はどうすることも出来ずにただ佇んで顔も映らない彼女が走り去っていく夢を。

辛くて涙が出た。何度も泣いた。辛くて辛くて辛くて、胸が張り裂けそうだと思った。こんなに切ない気持ちになったのは初めての

ことで、どうしていいか分からなかった。ただ、誰かに傍に居て欲しいと思った。だけでも、もう自分という存在にはそれすら願ってはいけないんだと知り、また泣いた。

泣き疲れた俺は、実はもう一つだけ夢を見た。今度はさっきの夢とは違って、天使が俺に語り掛けてくれる夢だった。こんなの許されたいと思っている自分の生み出した幻想だと思いながらも、その夢はとてもあったかくて、どうしてか自分が許された気がした。

次の日、熱は下がっていたが念のため病院は休むことにした。師長に連絡すると、「馬鹿は風邪ひかないんじゃないっけ？」なんて憎まれ口を言いながらも「ちゃんと治してから来なさいよ！子供達に迷惑が掛かるんだから……全く。」と言って、休暇を許してくれたので、俺はまたあの夢を見ることにした。

もう悪夢は見なかった。

* * *

二日ぶりの出勤である。何故か家の中が若干綺麗になっていたことと、お粥が作ってあったこと、頭に冷え。夕が貼ってあったことが不思議だったが、自分がやったんだと思うことにした。

そして、また会えるかと思い、二台目のロードレーサー（この間のはなくなっていた）を速度に注意しながら走る。彼女に、あの少

女に会えることを信じて。

だが、期待は大きく裏切られ、あの少女には会えなかった。

肩を落としていると、

「彼女全員に別れて欲しいって言ったんだって？水ぶっかけられたとか…え？！マジなの？」と、煩くまとわりつく師長（蠅）が一匹。大方元気づけてくれようとしていたんだろうけど、そんな大きい声で言わないでくれ。皆がこっちを見ている。…頭痛が酷くなりそう。でも、既に病棟には知られ渡っていたらしく、皆が好奇の目で見ていた。放って置いてくれ。

ますます元気をなくしていく俺。すると、師長が、「そういえば、あの子あんたんとこ行った？止めとけっていったんだけどさ、聞かなくって。…まさか、あんた変なことしてないでしょうね？」

師長の向ける疑惑の眼差しなんてどうでもよかった。

「誰か、俺のところに来た人がいるんですか！？その子は誰です！？教えて下さい！！」と、師長の肩を掴んで物凄い勢いで上下に揺すった。

師長は、目が回り気持ちが悪くなったのか手を口に当てながら、「その子のことは、昨日あんたに渡すようメモを渡されてただけだ…忘れてたわ…。」と、言い切った。

「…！！あんたは！！」

怒りの表情になった俺を見て、慌てたように待ったのポーズをと

る。

「わあー待つて！！待つて！！もうすぐ来るはずだから！！」

「はあ！？そんな都合のいいこと起こる訳ねーだろうが！！」

「あんたは昨日休んでいたから知らないかもしれないけどねえっ
…あっ！噂をすれば！！おーい！！壬紀！！こっちよ！！」

幾分乱暴に開けられた扉の音がして、その後続くパタパタという小さな足音。そして…

「遅れてすいませんっ！！」

天使がいた。

しかもどこかで聞いたことあるような声…

「「あっ！！」」

お互いに顔を見合わせて大きな声を出す。

「よかった…もう治ったんですね。」

「ああ…なんでここに？」

さっぱり訳が分からない俺に師長が簡単に説明してくれる。

「つ・ま・り、あんたがアホなスピード出して轢きそうになった女の子は、この病棟で働き始める看護師だったって訳。」

…いちいちムカツクが、よく分かった。

「じゃあ、君があ那时的…。」

「はい。慣れていないので救急処置も下手だったと思いますが…大丈夫でした？」伏せ目がちにしながら、首を傾げる少女になんとも言えないエクスタシーを感じた。

「ああ。大丈夫。大丈夫よ。だって馬鹿ですもの。それに王紀の処置は上手だったわよ。とても初めてには思えなかったもの。」「…。」

てめえ…。と作った握りこぶしを彼女に見られないように隠す。あれ…？なんでこんなに俺は焦っているんだ？彼女に見られたっていいじゃないか。見られたって…チラリと彼女を見やれば、

「うきゅー」と言って師長（横暴上司）に頭をナデナデされて嬉しそくに目を細めている。

駄目だ！！あの純粋な彼女には俺の裏を知られてはならない！！そう思い、引きつった笑みを浮かべ師長（性悪女）に話し掛ける。

「あの、し…じゃなくて、桃木師長。これから彼女に話があるのでちょっと席を外していただけませんか（早くでてけや、コラ）。」

「あら、もう手をつける気？切り替えが早いねえ（バラすわよ）。」

なんてお互いに笑顔で会話しながら師長（お邪魔虫）を追い出す。

彼女をエスコートして部屋を出ようとしたその時、「壬紀ー！！
変なことされそうになったら大きい声出すのよーほほほ。」なん
て言ってきたのでつい、扉を閉める手に力が籠り、ドアが物凄い勢
いでしまったのは気にしないことにしよう。

「さて。」二人きりになったところで口を開く。

「さっき聞いたばかりなんだけど、部屋に来てくれたのは、君
？」

「はい。随分うなされていたようでしたが、大丈夫でした？」

「…くく。」

「…あの…？」

「…あはははは」いきなり笑い出した俺をびつくりした目で見つ
める彼女。そうか、やっと分かった。

「…。」

「…ああ、ごめんね。やっと疑問が解けたものだから。名前を聞
いていなかったね。君、名前は？」

「…？桜庭 壬紀です。」

「お…僕の名前は、西宮 陸。よろしくね。壬紀ちゃん。」
“僕”なんて使ったのは何年ぶりだろう。まあ、これもいいかもしれな
い。心からの微笑みを漏らす。

「こちらこそお世話になりますっ!!」そう笑顔で返してくれた君は、まさに天使。

僕は気付いてしまったんだ。

君になら、この凍りついた心も鼓動を刻むし、自分の裏を隠したいと思える。君が望むのなら、何だってやってあげたいと思うし、心から笑えるんだ。

何より、君は僕の生きる意味を教えてくれているんだ。僕が今ここに生きる証を。

隣に居て欲しかったのは、“誰か”なんかじゃない。

僕が隣に居て欲しかったのは、

そう強く願うのは…

“君”だったんだね…壬紀。

…
ありがとう。

-
f
i
n
-

白衣の天使に魅せられて 西宮：side（後書き）

たはー。

やっと終わりました。

目が悲鳴を上げています。

思った以上に難産でしたよ……

こんなに長くなってしまいましたか！！

結構楽しく書けました。

読んでくださった方々、

本当にありがとうございます。

心からのお礼を申し上げます。

再会とは…難しいものです。（前書き）

謎の青年（？）の正体が明らかに…！

更新遅れました。ごめんなさい＞＜

再会とは…難しいものです。

…どうして。

どうして、貴方が。

「どうして琉依がここにいるのよ…!!」

思わぬ再会に驚きと戸惑いが交差して、上ずった大声を上げてしまった。

目を伏せて、こちらを見ようとしない琉依。

丙午 琉依。私の幼なじみであり、理解者であり、今現在私の…

「同じ職場だったら、一緒に―。」

モガッ。

「あゝー!!はい。じゃあ俺、新人に案内してきますね!!ほら!」私の手を引っ張りダッシュでその場から立ち去る琉依。

口を塞がれていて助けを呼べないのと、言うてからの琉依の行動が早すぎるのとで皆呆氣にとられた顔でポカンとしていた。

勿論、私もその中の一人だった。

人気がない場所まで連れて来られ、やっと口を塞いでいた拘束も解けた。久しぶりに吸い込んだ酸素が胸いっぱい広がる。…生き返った。

酸素の尊さを噛み締めながら、目の前の人物へと視線を投げかけた。

「何で琉依がここにいるのよ!!」

目の前には数時間前に別れた姿。っていつか、この病院だったわけ?! そう責め立てると、「…ここに転勤してきたんだ。」と言う。

この目の前で頂垂れている人物は、丙午 琉依。私の幼馴染でもあり、今現在同じ家に住んでいる。

だけど、それは決してラブとかではなく、ただ単にアパートを借りる上で人数がある程度いたほうが経済的に助かるという以外感情は持ち合わせていない。…勘違いが起らないよう初めに言っておくが、何も琉依と二人で暮らしているほど馬鹿ではない。もう一人、松嶋 百夜という幼馴染とも暮らしている。三人はいつも一緒だったので、離れ離れになるのが惜しいという気持ちもあったのだ。

「何で教えてくれなかったのよ!」おそらく百夜は知っていたのである。一人だけ知らなかった、という事実には悲しくなる。

「教えられるわけねえし…言ったら絶対一緒に行こうとか言うじゃない、お前…。」

「何で一緒に行っちゃいけないわけ？いいじゃない。どうせ同じところに行くんだっただけ…」

お前には関係ない。と突き放された気がして、少し涙声になってしまった。「…お前が可愛すぎるからいけないんだ。」小さな声の呟きに「え？」と聞き返すと、彼は顔を真っ赤に染め、「なんなんでもない！！」と言って顔を隠した。嫌われてはいないらしいことに安堵しつつ、言葉を紡ぐ。

「だったら、初めから理由を説明すればいいじゃない。きっと分かってくれ…」

「駄目なんだよ！！言ったら絶対殺される！！俺の首が飛ぶううううう（身体的な意味で）！！！！」間髪入れず帰ってきた返答に目を剥く。目の焦点が合っていない。どうやら彼にとっては深刻な状況らしい。

「そ、そんなに？…分かったわ。言わない。だけど、これからはもっと私を頼ってよ？」あの優しい柳先生に限ってそんなことはないと思いつつ、琉依の提案を飲んだ。

…だけど。

「ただいま戻りましたー。…あれ？」

なんでしょう、この視線は。

ステーション全ての視線がこちらに向いている。いや、正確に言えば、私と琉依に、だが。

じつとりと…いや、ねっとり（？）した視線。しかも何故か皆こちらを見ながらヒソヒソと話し合いを続けている。到底気分の良いものではない。さっきと違いすぎません？！

そんな視線を無視して仕事をしている琉依とは違い、居た堪れなくなつて患者の見回りに行こうとする腕を引かれた。何者！？驚いて見上げると、

「…待つて。」超真剣な顔の師長様がいらっしやいました。

だけど…怖っ！！怖すぎます、柳師長！！何その発情期のオスが、狙つてたメスとられたみたいな顔は！！いや、そういう顔してるけども！！いや、その顔でしかないんだけども！！

息がかかるほど近くに寄ってきた端正な顔。間を置いて重々しく開かれた口からは、とんでもない言葉が。

「…壬紀はさ、丙午と付き合っているのか？丙午のことが…好きなのか？」

……は？

続
く

再会とは…難しいものです。（後書き）

登場人物

看護師（精神科）：丙午 琉依「hinoe rui」

・壬紀の幼馴染

・モテるが壬紀に絶賛片思い中

・茶褐色の肌に黒髪

・20歳

・♂

看護師（???）：松嶋 百夜「matsushima y

uya」

・壬紀と琉依の幼馴染。

・????

・20歳

・♀

はい、終わりましたー。

やっと先に進むことが出来ましたね。

長かったー。

この話は、なかなかまとまらなかったなので苦労したのですが、こ

の中途半端さ…。

更新遅れてすいませんでした><

次回の更新はなるべく早くお届け出来たらいいなあと思います。

あ、ちなみに百夜さんについては今のところシークレットです。

次回か、その次(?)で徐々に出していきたいと思います。

次回もよろしく願いします。

再会とは…難しいものです。 続（前書き）

お気に入り登録してくださった皆様、ありがとうございました。

ご期待に添えるよう頑張りますので…！！

再会とは…難しいものです。 続

前回のあらすじ

『…壬紀はさ、丙午と付き合っているのか？丙午のことが…好きなのか？』

……は？

* * * * *

…いやいやいや、私は何かとても酷い聞き間違いをしてしまったようです。そう！あの言葉は聞き間違い！それ以外は認めませんよ！もう一回正確に思い出してみましよう！

『壬紀、丙午と付き合っているのか…？』ピッ。…もう一度。

『丙午と付き合っているの…』ピッ。…とうとう幻聴が…頭がフラフラします。

『付き合っている…』ピッ。いやあああああ！…分かりました！もう分かりましたから止めてください！これ以上傷を挟らないで下さいお願いします！

分かってます！これが現実逃避ってことぐらい！でも認めたくない

いんです！何言ってるんですか、この人！！

まずいフラグが私には見えます。バリ3ですよ！！もういつそ圏外でいて欲しいのに！！どうしてこういう時ばかり鋭くなるんでしょう。何で琉依の言葉を信じなかったのか後悔が物凄いです。ごめんねっ！琉依！！

近づいてくる柳先生。私の中の第六感が危険信号を鳴らしています！とにかくここは逃げ…

ガシッ！！（壬紀が腕を掴まれた音）

「…逃がさないよ。」腹黒スマイル100%

どうしたら…そんなブラックなスマイルが出来るんですか。その笑顔のせいで、マッ。で『スマイル下さい』なんて二度と言えなくなりましたよ！今！！

こうして私は捕まってしまったのでした。

「…だから何回も言ってるじゃないですか。私は琉依とは付き合っ
てません！！」

もうなん十回繰り返したんでしょう。ずっと同じことについて繰り返しているのも限界です。仕事しないでいいんですかー？職務放棄してますよー？あのブラックな笑顔のまま同じ質問を繰り返す柳先生。いや、質問というより拷問に近いです。…しつこい。しつこすぎる。

いい加減私の限界が来て文句言ってやろうと思っていたら、突然柳先生の携帯が鳴ったり響きました。目にも止まらぬ速さでケータイを手に取る先生。

ピッ。「…柳だが。見つかったのか。よし、こっちに連れて来い。」

…いつもと声のトーンが違いすぎて怖さで何も言えなくなりましてた。

数分後、丈夫そうな縄で縛られ、職員の皆さんに取り押さえられて足掻く琉依が連れて来られた。肩で息をするほど走ってたんだ…私を置いて。

恨めしい目で琉依を見ている私をよそに、琉依は柳先生を睨みつけて怒鳴っている。

「だから、俺たちは付き合ってたんかいなんだってんだろ！さっさと解けこの縄！！」

「…正直に言わないとずっとそのままだよ？」

「正直に言ってたんだろうがー！！」

「君は信用できないな…王紀。本当のこと、言ってる？」

「いや…ほんとに付き合っていないんですけど。」

「…王紀。」

その目は何ですか！？いやいや、これほんと！本当ですから！！
…っていうか、結局信用なしですか！！そう思ったら何かキレまし
た。

「どうして信じてくれないんですかつ！！さっきから何度も言っ
てるじゃないですかっ！！私と琉依は付き合っています！！ただ
の幼馴染です！！何でそこまで疑うんですかつ！！」

ありったけの声で言ったので息が切れます。…どうしてか琉依の
瞳が潤んでいたのだけれど、私は見ていなかったもので、いいしま
しょう。

柳先生（と、その他大勢）は驚愕の眼差しで私を見ている。そし
て、ゆっくりと…声を揃えて言いました。

「…だって入ってきたばっかなのに二人で仲良く（手を繋いで）
行っちゃうし、お互いに呼び捨てだし。」

自分を第三者に置き換えてみる…うん。これは言い訳できな…っ
て違う！！

「ちち違います！！全然付き合ってるとか、そういうのじゃない
んです！！ただ琉依とは一緒に住んでいるだけって…あ。」

唖然とした顔になる一同。目は見開かれたまま柳先生はいつもよ
り1オクターブ低い、どこか黒を含んだ声で言いました。

「…どういうことか、説明してくれるよね？勿論。」

…どうやら、もっとマズいフラグを踏んでしまったようです。

その後、結局信じて貰えずに百夜のところに行って誤解を解いてもらいました。

初日にしては…いささかハード過ぎます。私は何故かボロボロになった琉依に散々愚痴を言われながら帰路に着いたのです。

私と琉依は反省文をどっさりと書くはめに…。

ちょっと私情も混ざってる気がしないでもない反省文は、私の倍琉依の方が枚数が多くて琉依に泣き付かれて私も手伝ったのです。

…明日、自分が本当に精神科に呼ばれた訳など、まだ知る由もなく。

こうして長かった一日が過ぎてゆくのです。

再会とは…難しいものです。 続（後書き）

7話目でございます。

『本当に長かったな…あれ?! 初日じゃん!』

なんて作者もビックリしているところです。

さて、ようやく次から本格始動します。

とうとう準主役の登場…となる筈です。

長い投稿となりますが、気長にお付き合いくださいませ。

（柳先生を除く）スタッフの皆さんが彼女の顔を見て、『何でお前ばっかり…!!』と言って琉依を後でシメていたのは、また別の話。

…重大発表です。（前書き）

久しい更新となりましたが、楽しんでいただけたら光栄です。

今回からが二日目となるわけですが、やっと準主役の出番になりそうです。

（今回は彼はまだ出てきませんが、楽しみにしててくださいね。

… 重大発表です。

… 二日目

ある晴れた日のことでした。

院長から爆弾投下の様な、死刑判決を言い渡されたのは。

「… 専属看護師になって欲しい。」

「… は？ はあああつあああつあ！！？？」

… 何故こんなことに、なったのでしょうか。

私は真っ白になった頭の中で、こうなった経緯を思い出していたのでした。

それは琉依との誤解も解け、反省文を師長に提出しに行った時のことでした。

「壬紀、ちょっとこっち来てくれない？」

「？ええ、はい。なんでしょう。」

いつも笑顔で接してくれる柳先生が額に青筋を浮かべ、無理矢理笑いを作っていることに
気付き、不信を覚えていれば。

一緒に反省文を出しに行つたときの琉依の嫌そうな表情に気付いてさえいれば。

…こんなことには、ならなかったのでしょうか。

「付いて行つてやる。」と言つた琉依の優しさを受け取ろうとした私の手を取り、「いや、いい。」とバツサリ切つて捨てた柳先生は呆氣にとられている私たちを気にせず私の手を引いて、重々しい雰囲気醸し出す扉の前へと連れて行つたのです。その扉には金色のプレートが掛かつており、そこには“院長室”という文字が彫つてあつたのでした。

驚きのあまり口をパクパクとさせる私に向かつて、そこまで一言も喋らなかつた柳先生は、私の方を見ることもなくただ一言、「…ごめん。守りきれなかつた。」と言ひ、どういふことかと問おうとした私の言葉を遮るかの様にその扉をノックしたのでした。

そのノックの後、短く「入れ。」という返事が返され、私達は扉の先へと足を進めました。

扉の中には黒いスーツを着たガードマンが2人と、7人程の人数が円卓に腰掛けており、その真ん中にいた人物がゆっくりと顔を上げました。

その顔は、どこかで見たことあるような…そんな優しい雰囲気
纏っていました。

その人物に「…桜庭 壬紀さんだね？」と聞かれたとき、私は『
何となくこの声音に逆らえない。』と思いました。そしてコクコク
と頷く私をじっと見た後、目を閉じ、組んでいた手を円卓に付け、
ゆっくりと私の人生を左右することになる言葉を吐き出したのでし
た。

「…君に、ある患者の専属看護師になつてもらいたい。」

私の人生、どうなるんでしょう…。

続く

…重大発表です。（後書き）

後、今更なのですが…7話目の柳師長さんのいつていた言葉は、『松嶋』ではなく『丙午』でした。

すいません。全く気付かずに…!!

次の話で病院全体がどういった感じが分かる…筈です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5864y/>

Melancholy

2012年1月7日02時52分発行